

公益財団法人 日本骨髄バンク 第45回 業務執行会議 議事録

日 時： 平成29年7月21日（金）17：30～18：10
場 所： 廣瀬第2ビル 地下会議室
出 席： 齋藤 英彦（理事長）、小寺 良尚（副理事長）、浅野 史郎（理事）、加藤 俊一（同）、
鈴木 利治（同）、高梨 美乃子（同）、高橋 聡（同）
欠 席： 伊藤 雅治（副理事長）、金森 平和（理事）、佐々木 利和（同）、谷口 修一（同）、
橋本 明子（同）
陪 席： 櫻田龍司（厚生労働省 健康局難病対策課移植医療対策推進室）
傍 聴 者： 2名
事 務 局： 松菌 正人（事務局長）、五月女 忠雄（総務部長）、大久保 英彦（広報渉外部長）、
小瀧 美加（移植調整部長 兼 新規事業部長）、坂田 薫代（ドナーコーディネート
部長）、小島 勝（広報渉外部 広報TL）、谷澤 魅帆子（ドナーコーディネート部
指導研修TL）、渡邊 善久（総務部 総務企画TL）、関 由夏（関東地区事務局
地区代表）、上原 淳（総務部）（順不同、敬称略）

1. 開会

開会にあたり齋藤理事長が挨拶した。高橋聡新理事が就任の挨拶をした。

2. 業務執行会議の成立の可否

業務執行会議運営規則第6条により本業務執行会議が成立した。

3. 議長選出

業務執行会議運営規則第5条により業務執行会議の議長は理事長が当たることとされており、齋藤理事長が議長に選出された。

4. 議事録署名人の選出

議事録を作成するための議事録署名人は業務執行会議運営規則第8条により議長及び出席した副理事長がこれに記名、押印しなければならないとされており、齋藤理事長と小寺副理事長がこれに当たるとされた。

5. 議事録確認

第44回業務執行会議の議事録案を全会一致で了承した。

〔議 事〕

6. 協議事項（敬称略）

(1) コーディネート期間短縮に向けた取り組みについて（継続）

小瀧美加移植調整部長兼新規事業部長が資料に基づき説明した。

厚生労働科学研究（福田班）による「骨髄バンクコーディネート期間の短縮とドナープールの質向上による造血幹細胞移植の最適な機会提供に関する研究」に関して進捗状況を説明する。昨年より福田班と連携してコーディネート期間短縮に向けた取り組みを検討している。進捗および今後の課題について、6月の通常理事会で「厚生労働科学研究の実施状況について」として研究代表者の福田隆浩先生よりご講演いただいた。また7月8日に名古屋で「平成29年度第1回造血細胞移植合同班会議」が開催された。その中の「骨髄バンク福田班」研究分担者・協力者ミーティングに参加して、今後の課題と連携体制に関して意見交換したので報告する。まず今後のアクションプランである。研究班と当法人がプロジェクトチーム（以下、チームという）を作り、各施策のトライアルを行う案である。「コーディネートプロセスの効率化の検討」では、コーディネートが進みやすいドナーを選択できるシステムを構築すること、ドナー選定から採取までの期間短縮（現状75日→50日）などを話し合った。「ドナープールの質向上」では、バンク既登録ドナーのコーディネート進行率向上や、若年ドナーリクルートを話し合った。研究班発足から1年3カ月が経過して「コーディネートの期間短縮」と「ドナープールの質向上」の両面で、一定の分析結果が明らかになってきた。今後はバンクの実務面で具体策を実施できるよう、バンクと研究班が一体となって検討を進める体制が必要となる。今般、研究班から「研究班とバンクで合同チームを立ち上げ、施策を検討してはどうか」との意見があった。しかし、合同チームは運営上の難しさがあるので、研究班メンバーでチームを立ち上げ、バンク事務局がチームに連携する形をとることとしたい。チームは課題ごとに複数置かれるかもしれないが、構成はバンク関係者が主体となると思われる。なお、施策の策定・実施に際しては、必要に応じてルール変更・見直しも視野に入れる。本チームにおける具体的な進捗状況は、業務執行会議や理事会に随時報告し、必要な手続きを経て進めてまいりたい。本件に関しては、研究班長の福田先生とも認識を合わせている。

以上の説明の後で意見交換が行われ、全会一致で承認された。

（主な意見）

＜加藤＞ 福田班が積極的に研究に取り組んでいて、検討した内容を実現するための提案をしようとしている。その意気込みは評価したい。しかしバンクとしてどうするかという点を履き違えると結果的に引きずられてしまい、バンクの理事会や委員会の役割が曖昧になる危険がある。チーム編成の際に、理事会メンバーがきちんとした形で加わらないと結果的に「研究班が決める」という形になる恐れがある。メンバー構成がかなり重要だ。

＜齋藤＞ もっともなご意見である。

＜小寺＞ 研究班の決定は、重要案件として業務執行会議に諮るという理解でよいか。そこでGOサインが出たら実施して、場合によっては修正するという形になるのか。

＜小瀧＞ その通りである。

＜小寺＞ そのサイクルを極めてスピーディーに進めてほしい。やるかやらないかでかなり違ってくる。

（2）あべ静江公認ソングについて

小島広報渉外部TLが資料に基づき説明した。

バンク公認ソングは、過去にスーパーバンドの「笑顔のゆくえ」(2006年)、山本雅也さんの「ひとつながるーひと」(2014年)があった。この度、歌手のあべ静江さんが歌う「すべての命(ひかり)へ」をバンク公認ソングとしてよいかお伺いする。まずCD制作の経緯を説明する。名古屋を拠点とするアイドルグループ「勝手に応援アイドル!BSJ☆プロジェクト」(以下、BSJという)は、ボランティアとして大須万松寺献血ルームやバンクのイベント会場などでバンクをPRしている。BSJのラジオ番組にあべさんが出演した際、BSJがバンク応援を持ちかけ、あべさんが快諾して曲作りが始まった。CD1枚500円の収益金すべてが、バンクと「あいち骨髄バンクを支援する会」等に寄付される。同曲は愛知県赤十字血液センター公認のバンク応援イメージソングでもある。あべさんにテレビ、ラジオ番組などでPRしてもらうほか、コンサートやイベントでも販売する。あべさんは舞台「友情」(9月30日、10月1日)に医師役で出演する。またBSJが出演するテレビ、ラジオ番組、イベントで販売する。同グループの活動拠点「BSJシアター」や、オフィシャルサイトでも販売する。バンクホームページ内のYouTubeでの紹介や、イベントでの紹介も予定している。最後にあべさんのプロフィールである。1973年5月「コーヒーショップで」デビューし、同年「日本レコード大賞」新人賞を受賞。翌年、シングル「みずいろの手紙」が大ヒット。1974年、「NHK紅白歌合戦」に初出場し、女優としても活躍している。三重県出身ということで、松阪市ブランド大使やみえの国観光大使も務めている。

以上の説明の後で実際の曲を流した。意見交換が行われ、全会一致で承認された。

(主な意見)

- <齋藤> 1と2は歌っている人が違うが、両方を公認するのか。
- <小島> 同じ曲であり、両方とも公認を考えている。
- <齋藤> 過去の2曲は、公認ソングとして続いているのか。
- <小島> その通りである。
- <小寺> CDはどこで買えるのか。
- <小島> CDショップでは販売していない可能性がある。確実なのはBSJオフィシャルサイトやシアター、イベント会場である。
- <高梨> バンクの公認は歌以外もあるのか。公認に関する(審査の)ルールはあるのか。
- <大久保> 歌や曲に限るといった制約はない。歌以外ではキャラクター(「ディック・ブルーナ」や「コッコとズーズ」)のデザインがある。
- <小島> バンク公認大使という形で、歌手の笹原聖子さんにイベント出演していただいている。

7. 報告事項(敬称略)

(1) ドナー安全委員会報告

坂田ドナーコーディネーター部長が資料に基づき説明した。

6月3日に29年度第1回目のドナー安全委員会(以下、ドナー委という)を開催した。審議確認事項④「末梢血幹細胞採取後、心房細動の診断を受け、カテーテル手術となった事例」は、3

月に緊急安全情報を発出した事例である。「原因は断定できないが、素因があった可能性がある」と報告され、今後は問診を強化する。ドナーはカテーテル手術を受け、まもなくフォローアップ終了の見込みである。8月以降に安全情報を発出する。⑤「骨髄採取後、VVRを発症した症例について」は、採取から数時間後に病室からトイレに立った際、ドナーが倒れてしまった複数の事例である。7月14日のマンスリー発行に合わせ安全情報を発出した。またコーディネーターから入院中のドナーへの注意喚起を促した。次に⑫「健康上の申告のお願い」である。マラリア既往歴をドナーが申告せず提供に至った事例を踏まえ、ドナー向け文書を作成した。「正しく申告した」という署名をもらう運用である。次に事例検討である。今年2月1日から5月15日までに7例が採取検討となり、検討の結果予定通り採取した。採取直前延期はインフルエンザ発症により2例発生した。採取直前中止事例はなかった。事例の報告の(7)④は先ほど報告したマラリア既往歴ドナーの事例である。

(主な意見)

- <加藤> VVRで採取中止となった事例はどういう状況だったのか。
- <坂田> 自己血採血の時にVVRを起こして医師の判断で中止になった。
- <加藤> その場で中止になったということは、かなり深刻な状況だったということか。
- <坂田> 手元に資料がないので詳細は不明だが、そのように考えている。
- <加藤> 「分画異常」は、正確に表記すると「白血球の分画異常」である。マラリア既往歴の件に関連して、他の感染症、特に多いのがシャーガス病である。バンク事業でも(検査の)議論が必要と思うが、日赤の考え方はどうか。
- <高梨> 旅行歴で検査結果が陽性になった例はない。陽性者はすべて中南米で育ったか、もしくは母親が該当地域の出身である。問診は考慮してもよいが、検査の手段は限られている。
- <加藤> たとえばブラジルから日本に移住したドナーが、適合した時に日赤で検査することは可能か。
- <高梨> 日赤として検査の委託は受けないので、ここで即答できない。
- <加藤> ウェストナイルの時も同様に、厚生労働省の指導の下で外部(国立感染症研)に依頼して検査した。緊急案件ではないが、マラリア既往歴の件でクローズアップされたので、ほかの感染症も(日赤などで)検査すべきと問題提起したい。
- <小寺> 献血現場でもVVRを起こす例がある。一度起こした方は以後献血できないのか。
- <高梨> 重症のVVRを2回起こした場合は「(今後の献血は)ご遠慮いただいたほうがよい」という話をする。日赤では「前回の献血は大丈夫でしたか」と問診の際に尋ねるし(VVRの)記録も残している。

(2) 世界骨髄バンク機構(WMDA)の認定更新のためのサイトビジット報告

小瀧移植調整部長兼新規事業部長が口頭で報告した。

7月13日～14日に元ウェールズバンクと豪州バンクの調査員2名が来日した。バンク側は実務担当者のほか、国際委員会から岡本真一郎委員長、日本赤十字社からは高梨美乃子先生にお越しいただいた。

主にクオリティーマネージメントの整備をすることという指摘を受けた。企業においては製品やサービスの品質目標を設定し、そのための計画を立てて実行、検証、改善していく一連

の流れである。バンクに関しては、どのように管理していくかを明示した文書が必要とされた。職員教育手順、文書管理手順、マニュアル更新手順、WMDA通知の内部共有に関してそれぞれ手順書を作成すべきということである。今後のスケジュールは、WMDA側から文書で指摘が届き、こちらが回答した後で認定の判断を待つ。

(主な意見)

- <小寺> ほかの国のバンクも同じく文書（手順書）を整備しているのか。文書を残すことで何のメリットがあるのか。
- <小瀧> 誰がいつ見ても、同じクオリティーが担保されるような体制の整備が求められている。
- <小寺> 何のクオリティーをさすのか。
- <小瀧> 骨髄バンク運営全体の品質管理ということ。
- <高梨> たとえば問診を変更する場合、いつ変更したかを後から説明できるようにバージョン管理しなさい、という指摘である。文書にナンバリングしていくという理解である。

(3) 調整医師の新規申請・承認の報告

谷澤ドナーコーディネート部TLが資料に基づき説明した。

5月10日から7月12日の期間に新たに申請・承認された調整医師は21名、合計で1237名になった。

(4) 募金報告

大久保広報渉外部長が資料に基づき説明した。

6月の寄付は599万4824円(390件)となった。前年度比でマイナス220万円(マイナス26件)である。4～6月累計では件数で1152件(マイナス100件)、金額は2467万円(プラス780万円)となった。4月に個人から1000万円という大口寄付があったほか、6月も個人から100万円、今井きみ記念骨髄移植研究基金から100万円をいただいた。中国電力労組から50万円、ライオンズクラブ(神戸)からも34万円ほどいただいた。昨年はこの時期に300万円という大口遺贈があったため、昨年と比較すると今年はマイナスとなっている。

以 上